

昔、男と女がいた。少年はマトウラフィシエムシという名で、街で一番の金持ちだった。少女の方はマリアムという名で、非常に貧しかったがとても美しかった。

或る日、マリアムは町へ行く道の途中で、顔と身体中に傷跡のある老婆に出逢った。老婆はマリアムに、どこに行くのかを尋ねた後に言った。

「お前さんがその大層綺麗な風采でそこに行ったりしたら、問題を起こしてしまい、最後には殺されそうになって、家には決して戻れないことになる。だから、私たちの外見を取り替えたらどうだろう。もし何か起こったら助けに来てあげよう」。

そこで、若い娘は老婆の外見で出発し、とある家に着き、扉をそっと叩いて水を乞うた。入るや否や、家の住人はその外見に恐れをなした。住人のひとりが言った。

「こんな醜い人間に水のコップを与えるなんて御免だ」。

若い娘は立ち去って他の家まで行き、そっと扉を叩いて水を乞うたところ、家族の年長者が彼女の外見を見て、わめいた。

「この汚い女、行ってしまえ。うちの階段にお前の汚い足を置かれるのは嫌だ。お前のような醜い奴に水をやろうなんて冗談じゃない、出て行け！！」。

彼女はそこから去って、3番目の家で同じように試みた。扉をそっと叩き、同じように、少しの水を頼んだ。家族の年長の女は乱暴に扱い、家に入らせるのも水をやるのも拒んだ。しかし、マリアムが現れた時にそこにいた彼女の兄はすぐに応じた。

「来させなさい。我々はムスリムなのだから、彼女に少し水を与えなさい」。

妹は答えた。

「いいえ、それは出来ません。彼女に水をやるなんて無理です。それに、どのコップで水をやればいいんですか。モハメドのコップもアトウマヌのコップも使えません。うちに迎えるような人間じゃないんですから」。

兄は自分のコップを彼女が使えるよう頼み、水を探して彼女に与えた。彼女が飲み終わると、少年は彼女に尋ねた。

「それにしても一体どこにいくのですか？」。

マリアムは答えた。

「私は寝るところを探しています。私には行くあてがありません」。

「ここにいて台所でなら寝てもいいですよ」。

「台所でもいいので、ここに泊まります」。

少年は、若い娘が泊まる場所をあてどなく探して外にいるよりは、台所に寝かせようという彼の決定を、他の家族に伝えに行った。家族はひどく反対した。

「モハメドがしたことをご覧よ。この家に、醜い瘡だらけの女を迎えたんだ。うちに彼女にいてほしくない」。

彼らは口論したが、モハメドは決定を下し、それに従わせた。最後に決まったのは、若い娘が、台所から出ないという条件で、そして家の他の部屋に通じる階段も利用しない、という条件で家にもよいことになった。若い娘はこうして台所にいて、そこで眠った。

或る日、モハメドはボクシングの試合に行くと言われ、出発後すぐに、大変危険なので、死ぬのだったら死んでも構わないと言った。マリウムは少年が死んでしまうと思ってこの状況に心配になり、老婆に会いに戻り、自分の姿を戻してくれるように頼んだ。そして、神は美しさに加えて、彼女にヘラクレス並みの力も与えて下さった。老婆は彼女に本来の姿を返してから、木の幹を引き抜き、マリウムはそれを取って、試合が行われている場所に行った。

マリウムは試合会場に行き、人々が互いに殴り合っているのを見ると、若い男の姿を認めたのでそこに急いだ。彼は他の男に殴られているところだった。彼女はモハメドを助けて相手と戦い、ノックアウトした後、来た時と同じくらい速く去って行った。彼女は老婆に再び会うと、老婆の外見になり、台所に戻った。

家族の者が戻ってきて、皆起こったことについて話していた。「今日はモハメドを助けにすごい娘がやって来た。あんな綺麗な女性を見たことがない。なんて美しかったことだろう。彼女と結婚する男は何て幸せ者だろう、それほど彼女は素敵だ」。彼らは皆、あの若い娘がどこから来たのだろうと思っていた。少年のひとは、もう一度会うためなら100万払ってもいいとまで言った。

また他の日に、タウラブが町で行われた。若い娘は皆、ここぞとばかりに着飾った。家の男達は、誰もその醜さゆえにマリウムに目を向けないと思って、そこに行かないように命じた。家族全員が出発したので、マリウムはその機に乗じて老婆のところに、元の外見を取り戻しに行き、祭りに向かった。

彼女が現れると祭りは最高潮に達し、すべての者が彼女の美しさに驚嘆し、一挙手一投足に注目し、祭りは彼女が中心となり、彼女は祭りを引っかきまわし、大混乱に陥れた。彼女はすぐさま、祭りの場から離れ、老婆の外見になり、家の台所に引っ込んだ。

家族は帰る途中で、待ちきれずに祭りを盛り上げた出来事について話し始めた。「あの若い娘は帰ってしまった、タウラブにいた子だけど、どこからあんなに素敵な子が来たのだろう。そばにいられる夫はさぞ幸せなことだ。もし彼女が僕のものだったら足さえなめるよ」。

或る日、モハメドは旅に出ることを告げた。家族のそれぞれがする仕事があった。皆、色々な種類のパンを準備しなければならなかった。そしてすべてが、彼が持って行けるように整えられた。マリウムもまたパンを作らなければならなかった。彼女はパン生地を用意し、その中に指輪を入れた。そこにはこう書かれていた「この指輪を見つけたらすぐに帰りなさい。奥さんが待っているから」。彼女はそれを籠に入れて他のものと一緒に焼いた。

準備が揃った時、彼は、一番こんがり焼けてきれいなパンが自分のものであるのに気づいた。他の者のものは、焼けすぎたり、生地が十分にこねてなかったりしたものだった。

モハメドは家族全員が準備したもの全てを取り、旅に持って行った。少し経ってから、彼と仲間は空腹を覚えた。モハメドはひとつのパンを選び、それを割ると指輪を見つけた。彼は、刻んである文を読むと、未来の妻が家にいることを確信して、道に戻ることを決めた。

家に戻ると彼は告げた。

「私の妻が家にいる」。

家族のひとりがすぐに答えた。

「この家にいるとしたら、一体誰のことなんだろう」。

彼は答えた。

「私はマリアムと結婚する」。

「そんなこと論外です。あんな醜い女と結婚するなんてだめです」。

彼らは家の中で言い争ったが、モハメドは彼女と結婚するという考えを変えなかった。最後には家族も結婚を認めたが、若い娘は家の地下室から出てはいけなし、他の部屋に入ること(階段と絨毯も含む)も許されなかった。つまり、モハメドは彼女と結婚出来るが、彼も彼女と一緒に地下室にすることになる。彼はその条件を受け入れた。

ということで彼らは結婚したが、モハメドは彼の妻と寝なかった。彼女は寝台に、彼は地面に寝た。彼は、妻がたくさん瘡で自分を汚すのを望まなかったからだ。

2 日が経ったが、モハメドは相変わらず妻と寝なかった。翌日の真夜中、世間が寝静まっている時、若い娘は老婆に会いに戻った。

「おばあさん、私の外見を元に戻してくれますか。やっと私が愛する男の人を見つけ、結婚したのです」。

老婆は彼女にその外見を戻し、服を整え、髪を結び、彼女はまばゆいばかりになった。彼女は前よりももっと美しくなった。彼女は元の外見で家に戻り、床に入ってモハメドを起こした。

「起きて下さい。早く起きて」。

「瘡だらけの手で触らないでくれ。ばい菌をうつされたら汚くなるだろう。触らないでくれ」。

「起きて下さい。見せたいものがあります」。

彼は起きて、余りの美しさに驚いた。彼はどうしていいかわからず、それほど彼には余りのことで、とても美しい彼女を眺めるだけだった。彼は彼女に気を遣い、彼女に合ったいい織物を探しにいった。彼は、怪我をするからと、彼女が動くことも望まなかった。彼は家族を招くことを決めた。